

東洋思想と日本人の倫理観

——子ども学とは何か(9)——

黒田 敏夫

キーワード：東洋思想、倫理、道徳、仏教、儒教、神道

序文

この論文は、西洋思想との比較を念頭において日本人の倫理的価値観の源泉について、論述することになる。しかし、現代は、日本人がどのような思想に一番影響を受けているか良くわからない時代だと言える。自分が生まれ育った環境から影響を受けるのであるが、それが親であったり、地域の人達や学校で出会った人であったり、本であったりするであろう。さらに情報化時代においては、テレビやインターネットによる影響はかなりのものがあると言える。私たちの道徳観の源泉はどこにあるのかわからない状況でもある。

ところで現在は正式な教科ではない「道徳の時間」を「特別の教科」に格上げし、早ければ平成30年度からは「道徳の教科化」を目指すとする流れがある。この論文においてはこの問題についても考察することになる。

改正教育基本法では教育の目的¹は「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として比露な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期しておこなわれなければならない」と規定され、それを実現すべき目標²として、従来から規定されている「個人の価値の尊重、正義、責任」に加えて「主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度」、「生命や自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度」、「伝統と文化を尊重」し、「我が国と郷土を愛する」とともに「他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度」などが規定されている。これらの実現に向け、義務教育の学校で行う道徳教育は行わなければならないとされている。

本論文では、とりわけ小学校学習指導要領解説 道徳編³に示されている道徳教育の目標などに触れながら、そもそも私たちの道徳観や価値観はどのように形成されたのか、そしてそれを生み出した、特に東洋の思想家や宗教者の思想について基本的なものを整理してみたい。その思想や価値観がその時代に影響を与える根拠となるものを思想史の上から考察し、これからの道徳教育の在り方を思想史の上から考察してみたい。

第1章 ブッダの思想

宗教統計調査⁴によると日本人の中の仏教系の信徒数は約8500万人であり、神道系の信者数は約1億100万人、キリスト教系の信者数は約190万人である。8割近い人が仏教的な価値観の影響を受けているといえる。例えば、一般化された価値観をあげてみると、誕生を祝うこと、あらゆることに感謝すること、先祖を供養すること、血のつながった家族を大切にすること、年長者に対して尊敬の念をもつこと、死者を汚さないこと、お互い様で互いに助け合うことなどが挙げられよう。これらが仏教の根本的な教義の源となるブッダの思想に由来するものであるかどうかは疑問であるが、仏教の伝統の中で形成されてきたものであることは確かである。

仏教の教えでは、考えられない昔から人間は存在していたと考えられ、生命は輪廻を繰り返して来たとされる。生命は6つの世界（六道）（1. 地獄、2. 餓鬼、3. 畜生、4. 修羅、5. 人間、6. 天人）を永遠の昔から永遠の未来に生まれ変わっていくと考えるのが輪廻説である。これは日本人に定着し、良く知られている考えであろう。何らかの形で生命が引き継がれ、未来にその生命を伝えていくという考えは、遺伝子が引き継がれていくという生物学的な考えであり、科学的であるともいえる。生命は縁起の法に従って、この世に現れ存在し、引き継がれていく。「縁起」とは「これあれば、かれあり。これを生ずるがゆえに、かれ生ず。これなければ、かれなし。これ滅すがゆえに、かれ滅す」と説かれ、「あいよって生ぜしめる力（働き）」のことであり、我々の経験するすべての現象は、この「縁起」（互いに条件付けの関係）によって成立存在せしめられていると考えられる。

多くの日本人は、生まれ育っていくなかで、家庭環境や学校環境、社会環境のなかから、またテレビ、雑誌、映画などの情報から、仏教的な輪廻転生的なこの世の中の人間存在を含めた現象のあり方を見ているともいえる。「生命の生まれ変わり」をどれくらいの日本人が真剣に信じているかどうかはわからないが、それを神話としてとらえている人は多いと思われる。そして1. 生命が引き継がれていること、2. 歴史における現象が繰り返されていること、を輪廻転生の中で納得しているものは多いと思われる。このような形で日本人の人生観、歴史観、世界観、宇宙観に与える影響は大きい。

しかし、ブッダの教えそのものは、「縁起」という「根本条件」によって成立せしめられている我々の現象は「苦なる存在」「迷いの存在」として示されているのである。人間は「迷いの存在」（六道）を繰り返すものであり、「輪廻」を離れることができない存在なのである。人間は自己がそのような姿であることを自覚し、「輪廻」の原因である「縁起」（根本条件）を滅することができる「真理に目覚めた人」になることによって「輪廻」の束縛を離れ、涅槃の境地に達することができるのである。

また、ブッダの思想の中心のひとつに「神の存在の否定」がある。ブッダは、彼が影響を受けたウパニシャッド哲学の「梵（ブラフマン）（世界、宇宙の原理）」が神という絶対者ではないと教えるのである。それは世界や宇宙を産むところの「根本条件」であり、宇宙の「法」とであると

教える。キリスト教は宇宙を創造したのは全知全能の絶対者である「神」であると神話的に教えるのであるが、これとは根本的に違う宗教の類型である。絶対者をキリスト教のように実体化せず、宇宙を産みだした「法」として考えるのである。ところで、ウパニシャッド哲学では「我（アートマン）は「主体性の原理」であり、身体は死滅しても「我（アートマン）」は永遠に生まれ変わり「不死」であると考え。輪廻）更に「宇宙の原理（ブラフマン）」と「主体性の原理（アートマン）」は根本において一つであると考えるのである。それに対し、ブッダは「我（アートマン）」を実体化して、自分の中の絶対性としてはならない、とらわれの自我を捨てて、我執なき本来の自己「無我」を実現すべきと考えるのである。ブッダの教えはこのような自己実現を求めているのである。

ギリシャ哲学における魂（プシュケー）は人間の本質であるとされ、魂は不死であるとされる。しかし、キリスト教の本来の教えは人間の魂は身体の死とともに滅び、キリストの復活の恵みに預かることを通して蘇るとされるのである。ギリシャ哲学とキリスト教の思想は大きく異なっている。西洋哲学はギリシャ哲学の伝統とキリスト教の思想の伝統の影響を受けて成立したものである。人間の魂についての思想においても相対立する考えが常に内包されている。近代哲学の祖とされるデカルトの我もギリシャ的な思想の影響が強いと考えられる。近代市民国家における市民としての個人もヒューマンイズムにおける人間の尊厳性と自由、キリスト教における神によって与えられた生命の尊厳と自由という形で議論されてきた。

東洋思想においては、個人の自覚的認識の深みにおいては優れているのであるが、西洋思想におけるような、学問的、論理的な議論に弱いように思える。

ブッダの思想は長い歴史と伝統の中で、現代の日本に大きな影響を及ぼしている。生命のあり方や人間存在のあり方、すべての宇宙のあり方について深い教えを示している。日本の仏教的な伝統によって伝えられてきたブッダの思想はどのような課題をもっているか、日本人の道德観の課題として述べたいのであるが、この小論では入り口の議論だけにとどめておく。ブッダの思想は深遠なもので、これが世俗化され、時代の中で教訓化されたものが、時の支配者によって道德観として民衆に広められたといえる。多くの宗教がそうであるように、徐々に世俗化されていく面と何らかの意図のもとに強制的に広められるという二つの側面がある。

輪廻のあり方を乗り越え解脱すること、永遠なる実体を否定する無常観、無我観がこの国を担う子どもたちの道德的価値観としてどのようにして形成されるのか、非常に難しいものを感じる。逆に輪廻のあり方を認め、父や母の縁があり自分があると縁起観をそのまま認め、父母に対する敬愛や先祖崇拝を仏教の教えと思い、無常の在りかたの深みを虚しさとして諦めてしまう心性を促していないか。

第2章 孔子の思想

日本の思想を考えると仏教や神道、儒教の3つの思想の影響が大きいといえる。仏教や儒教の教えが6世紀の半ばに日本に入って来て、天皇制の中で広められたということは不思議な現象と

いえよう。神道の神官である天皇、宗教としての仏教、制度としての儒教的な考えが矛盾しないものとして受け入れられている。この辺りの詳細な議論はここではしないが、この三つの思想が日本の代表的な思想である。孔子の思想は道徳思想として紹介されるが、孔子の理想とする政治思想の背景になっている宗教を紹介してみる。孔子の生きた春秋戦国時代は秩序の乱れた時代であった。孔子は周の時代の初期の周公を尊敬しており、彼の政治を模範にし秩序のある社会を取り戻したいと願っていた。周公の時代には、秩序の基本になっている宗族制が機能し、その上に封建制が成り立っていた。孔子は混乱よりも何より秩序の安定が大切と考えていたのである。その封建制を支えていたのが「宗族制と祖先崇拜」である。「宗族」は父と息子という関係を軸とする男系の血縁集団であり、その根本には祖先崇拜が結びついている。「祖先崇拜」の内容は、祖先の靈魂を崇拝することである。人は死んでも靈魂はなくならないと考える。人は死んで「鬼(き)」という別の死者の存在になる。天や祖先の「鬼」を祭ることが「徳」と考えられていた。孔子自身はこの「鬼」そのものについては深く論究はせず、その存在を前提にする祭祀体系を重要だったと考えたのである。

孔子の思想をこのような背景のもとに見てみるとよくわかるが、孔子はそこにとどまらず、その祭祀的意味、慣習的意味から抜け出そうとしている。孔子の思想の特徴は「仁」「忠」「恕」「礼」などで示される。「仁」は「心からの人間への愛」を表す普遍的愛といえる。「忠」は「自分自身に嘘、いつわりのないこと」、「恕」は「他人に対する思いやり」を表す概念である。「礼」は「仁」を客観化してみた側面で、「仁」の実践、道徳的实践のような意味をもつ。孔子の「孝」と「悌」の思想も同じ構造をもっている。「孝」は子が父母や祖先に使えることを表し、「悌」は同郷の年長者を敬う心を表す。これらは血縁や地縁にもとづく道徳である。

第3章 神道の思想

神道については簡単に述べる。天皇家の神道と呼ばれる「皇室神道」、戦前は国家神道にまとめられた苦い経験をもつ「神社神道」、戦後は氏子、崇敬者などの組織により祭祀儀礼信仰となっている。そして神道系の新興宗教である「教派神道」などがあげられよう。しかし、この区分では語り切れないものがあるのも事実である。これらの神道で崇められている神は八百万の神で、多神教の形態をとっている。また「祖霊崇拜」が強い。それ故同じ地域に住んでいる人たちが祀る地縁、血縁に根差す氏神信仰のような形態になったといえる。縄文時代以来の宗教の伝統を見ても、五穀豊穡をかなえてくれる神、安産をかなえてくれる神、天災から守ってくれる神、幸福にしてくれる神など様々である。そこに民衆の心が表れているともいえる素朴な宗教である。国家神道の歴史は反省しなければならないものがあるが、元々は素朴な人々の宗教心を利用したものであると考えられる。

第4章 道徳教育の在り方

ブッダの思想も孔子の思想も普遍的な意味をもつ偉大な思想である。しかし、これらが広まっていく中で、時代や社会的環境、時の政治的支配者との関係の中で、世俗化されてきたといえる。それ故、ブッダや孔子の思想そのものとは異なった考えが広まっているともいえる。広まり方の過程で、ある程度変質していくことはやむを得ないことであろう。だからこそ、常に問い続け、正しい価値を学んでいかなければならない。私たちは歴史的伝統や慣習から身に着けてきた「前理解」（偏見）を常に反省して「正しい理解」を得るようにしていかなければならない。

ところで、道徳の教科化が謳われているのであるが、どのように授業をするのか困難さを感じる。そもそも明治時代以前の日本の伝統の中で、ギリシャ哲学のソクラテスのように道徳学や倫理学の一般原理を求めた哲学や学問があったであろうか、疑問に思う。東洋思想においては特に道徳的価値観の背後に宗教的な価値観があり、その価値観がリアリティーを持たせてきたことは確かである。日本においても道徳的価値観とは何か、どの様に培われていったのかという哲学的な議論はなかったのではないか。

どこまでも真理を愛し求めていく者が、自己の相対化が可能であり、一般的普遍的倫理の探究が可能になるのではないか。自分が特殊な宗教的価値観の中にあつたとしても、真理を愛し求めていく者、問い続ける者である限り、一般的普遍的真理につながる者である。熱狂主義に見られるように、宗教的価値観は人間にとって大きなリアリティーを与えるように思われるが、自己反省を伴わず、自己相対化ができない宗教は常に独断的であり、普遍的真理にはなれない。人間は時間的空間的な存在であり、具体的な場所と歴史の中で生まれ、育ち、それぞれは特殊な、また個別な価値観をもつようになるのである。日本人は仏教や儒教、神道の教えを時代的場所的な制限の中で教えられ、親しむようになり、育ってきている。西洋の場合とは異なり、神を認めない仏教、道徳的な儒教、多神教の神道といった様々な宗教形態に慣らされ、突き詰めれば矛盾する様々な価値観に影響されながら道徳観を持たされてきた。

日本における道徳教育においては、様々な宗教観や価値観が混在しているだけに、しっかりとした理性的探究を根底においた道徳教育が必要である。

それが「なぜ正しいのか」「なぜ、そうなのか」という問いをしっかりと受け止めながら、その「問いかけ」こそ真理、真実、正義の追求と獲得にとってなくてはならないものである。自己保身が第一であるとする政治家や宗教家にとっては、何も考えずに自分に従ってくれる民衆を求めるが日本国憲法や教育基本法が求める人間像はそうではない。幼児期や小学校の時から道徳の基礎が培われるといわれる時期においては、特にそのプロセスは大切である。

以下、「小学校学習指導要領解説 道徳編」を参考にして道徳教育の内容とあるべき姿についてコメントしてみよう。

道徳教育の学校段階における重点の明確化⁵として、幼稚園では「規範意識の芽生えを培うこと」、小学校では「生きる上で基盤となる道徳的価値観の形成を図る指導」と「自己の生き方に

についての指導を充実すること」、中学校においては「社会とのかかわりを踏まえ、人間としての生き方を見つめさせる指導を充実すること」、高等学校においては「社会の一員としての自己の生き方を探求するなど人間としての在り方生き方についての自覚を一層深める指導を充実すること」と記している。

ここにおいても、「規範意識」とは何か、「生きる上で基盤となる道徳的価値観」とは何か、「人間としての生き方」とはどんな生き方か、「自己の生き方」「人間としての生き方」とは何かを何よりも先にしっかりと探究していくことが大切なのである。探究しながら学ぶものでもある。

道徳教育の理念については、以下のように記述している。「道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。」⁶

この理念をやや具体的に示した道徳教育の目標は以下の通りである。⁷

- (1) 人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を培う
- (2) 豊かな心をはぐくむ
- (3) 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図る人間を育成する
- (4) 公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努める人間を育成する
- (5) 他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献する人間を育成する
- (6) 未来を拓く主体性のある日本人を育成する
- (7) その基盤としての道徳性を養う

これらについては、誰もが悪い内容とは思わないであろう。しかし、戦争の絶えないこの時代で「人間尊重の精神」とは、「生命に対する畏敬の念」とは、「豊かな心」とは、「伝統と文化の尊重」とは、「我が国と郷土」を愛するとは、「国際平和」とは、「主体性のある日本人」とは、「その基盤としての道徳性」とは何か、全く異なる解答や説明が可能なテーマである。私たち自身が問い続けていかなければならない問題でもある。子どもたちと共に問いながら学んでいかなければならない問題である。「人間尊重の精神」とは、「生命に対する畏敬の念」とは……、これらは中味がわからないものになっている。これらの概念の中味についても様々な議論が生じる課題であり、まずはその本質を問うところから考えていかなければならないのではないか。その道徳性への問いそのものが道徳性を学んでいくことにおける第一歩である。多様な価値観を受け止め、認め合いながら、問い続けていくことが大切である。

最後に、学校で道徳教育を行う上での内容項目として以下が示されている。これらを子どもた

ちに教えていくに際し、私たち自身が深く問い、子どもたちと共に問いながら考えていかなければならない事柄であることを考えていただきたい。

1 第1学年及び第2学年の内容

1 主として自分自身に関すること

- (1) 健康や安全に気を付け、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。
- (2) 自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。
- (3) よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。
- (4) うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。

2 主として他の人とのかかわりに関すること

- (1) 気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。
- (2) 幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。
- (3) 友達と仲よくし、助け合う。
- (4) 日ごろ世話になっている人々に感謝する。

3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること

- (1) 生きることを喜び、生命を大切にする心をもつ。
- (2) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。
- (3) 美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。

4 主として集団や社会とのかかわりに関すること

- (1) 約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にする。
- (2) はたらくことのよさを感じて、みんなのために働く。
- (3) 父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。
- (4) 先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。
- (5) 郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。

2 第3学年及び第4学年の内容

1 主として自分自身に関すること

- (1) 自分でできることはじぶんでやり、よく考えて行動し、節度のある生活をする。
- (2) 自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。
- (3) 正しいと判断したことは、勇気をもって行う。
- (4) 過ちは素直に改め、正直に明るい心で元気よく生活する。
- (5) 自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。

2 主として他の人とのかかわりに関すること

- (1) 礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。
- (2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。
- (3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。
- (4) 生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。

3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること

- (1) 生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。
- (2) 自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする。
- (3) 美しいものや気高いものに感動する心をもつ。

4 主として集団や社会とのかかわりに関すること

- (1) 約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。
- (2) 働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。
- (3) 父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。
- (4) 先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学級をつくる。
- (5) 郷土の伝統と文化を大切に、郷土を愛する心をもつ。
- (6) 我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。

3 第5学年及び第6学年の内容

1 主として自分自身に関すること

- (1) 生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛ける。
- (2) より高い目標を立て、希望をもってくじけないで努力する。
- (3) 自由を大切に、自律的で責任のある行動をする。
- (4) 誠実に、明るく楽しく生活する。
- (5) 真理を大切に、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。
- (6) 自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。

2 主として他の人とかかわりに関すること

- (1) 時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。
- (2) 誰に対しても思いやりの心もち、相手の立場に立って親切にする。
- (3) 互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。
- (4) 謙虚な心もち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にする。
- (5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。

3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること

- (1) 生命がかけがいのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。
- (2) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする。
- (3) 美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。

4 主として集団や社会とのかかわりに関すること

- (1) 公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切に、進んで義務を果たす。
- (2) だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。
- (3) 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。

- (4) 働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。
- (5) 父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。
- (6) 先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。
- (7) 郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。
- (8) 外国の人々や文化を大切にすることをもち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。

注

- 1 教育基本法 第一章 第一条
- 2 同 第一章 第二条 二 三 四 五
- 3 小学校学習指導要領解説 道徳編 文部科学省 平成 20 年 8 月
- 4 宗教統計調査結果 文化庁文化部 宗教課 平成 23 年 12 月 31 日
- 5 小学校学習指導要領解説 道徳編 文部科学省 平成 20 年 8 月 4 頁
- 6 小学校学習指導要領 第 1 章総則 「第 1 教育課程編成の一般方針」の 2
- 7 同 第 3 章 道徳 「第 1 目標」